資料紹介　御辻

與那嶺一子

Material Note “Michiji”

Ichiko　YONAMINE

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要　第９号別刷
2016年３月30日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.9
March, 2016

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 (Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus.Art Mus.), No. 9 , pp.63 − 84, 2016

資料紹介　御辻

與那嶺一子 [1)]

Material Note “Michiji”

Ichiko　YONAMINE [1)]

Ⅰ　はじめに

琉球王国時代の染織品に「御辻」「美辻」というものがある。これが袱紗状のもので、「ミツィジ」と呼ばれていたことは、『沖縄語辞典』へ記載にもあるように既知ことであるが、現在の暮らしのなかで使われる場面がないこともあり、その存在は忘れ去られつつあると言える。

王国時代、近世における御辻の作例が残っていることは、これまで、断片的に報告されてきた(註1)。また、「大久米島展」(1996年／沖縄県立博物館)、「包むこころ−ふろしき−」(1998年／沖縄県立博物館)「うちくい−沖縄のふろしき−」(2015年／沖縄県立博物館・美術館）の展覧会で紹介されてきた。しかし、それは概要を示すのみであった。

近世の貴重な作例は3件4枚あり、伊是名島、久米島の旧家が所有していたものである。今回、これらの資料を採寸し、布帛素材についての確認調査、史料による補足調査の結果をまとめ、王国時代の御辻の形態や役割などを考察してみた。

Ⅱ　「御辻」とは

調査の結果を報告する前に、「御辻」とはどのようなものか、史料やこれまで御辻について述べられた文献から、概要をまとめてみた。

1　史料や文献にみられる「御辻」

「御辻」あるいは「みちじ」などそれに類する表現は近世（18世紀）から近代にかけて確認される。

御辻らしき物について触れた最初の記録は1711年に編集された『混効験集』(註2)で、「辻うちこい」とある。「うちこい」とは敷く、掛ける（覆う）、包む役割のある染織品のことで、近代においては「ウチュクィ」（首里・那覇）・「フチュズ・ウツフィ」（宮古）「ウツパイ」・（石垣）などと呼ばれる。『混効験集』に記される「辻うちこい」について伊波普猷は「袱紗状」のものと述べている(註3)。

この他、近世の士族の暮らしを綴った、『伊江親方日々記三』には、塩ぶたの進物方法とともに「御辻」の記載がみられる(註4)。また『御物方　巳日番』には、御辻の仕立て替えについての記述が残る(註5)。

近世末、伊是名島玉御殿における公事清明祭に必要な道具類の目録『玉御殿御道具帳』（同治八（1870）年）には「美辻壱枚鏡赤地金入錦台水色紗」「平坂壱枚水色花さや御紋付」とある(註6)。「平坂」は『混効験集』にある「平板」のことと思われる。一つは「美辻」、もう一方は「平坂」と標記されていることには意味があると思われるが、その理由は今のところよく分からない。「平坂」には御紋が付くが、「美辻」には紋はなく、台となる布帛に鏡と示す布帛を縫い付けたものと記されており、その違いが呼び名と関係しているかどうかは不明である。

「みちじ」は廃藩置県後も掛け物（覆い）として使われていた。

鎌倉芳太郎が残したノート(1924年･1927年）には、沖縄滞在中に、支那布を使用した「ミチジ」を参考品として求めたことが記載さてれている(註7)。

また、1930年、那覇市郵便局前にオープンした沖縄縣物産館では「みちじ（琉球の袱紗)」が琉球土産として販売されている(註8／写真1)。

八重山の近世末から近代にかけての生活の様子を記した『八重山生活誌』では、掛け物とした風呂敷を「チジウツパイ」と呼んでいる(註9)。

史料をたどってみると、「御辻」は御道具や進物な

[1)] 沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

どに掛けて使う袱紗のような布帛を示す言葉であったこと、18 世紀から 19 世紀まで生活のなかで使われていたが、戦後 70 年を経過するなかで、その利用方法とともに言葉も忘れ去られつつあるというのが現状である。

2 「御辻」の形態

御辻とはどのようなものだろうか。

「辻」或いは「チジ」は、頂を意味し、物に掛けて山を作るように天頂を被うものと解釈される (註 9)。

史料または文献にある御辻の形態は次のように記載されている。

- 頂即ち真中に刺繍したる袱紗状の如きもの (註 3)
- 鏡赤地金入錦台水色紗 (註 6)
- 丸紋龍ノ模様アル鶯茶色ノ浮織地ノ中ニ「ウマントン」ヲ以テ装飾シタルモノ (註 7)
- 赤、黄、黒の淵で中央は鶴亀松竹梅等の模様 (註 8)

御辻の形は方形の台となる布帛の中央にそれより小さい方形の布帛を縫いつけたものという事になる(図1)。中央の布帛が「頂 (チジ)」呼ばれるもので、『混効験集』でいう「辻うちこい」になる。その「頂」は「鏡」と示す事例もある。

3 「御辻」の使用方法

既に述べたように「御辻」は袱紗と同様に、掛け物 (覆い) として使われるものである。

その使用方法は、『伊江親方日々記　三』(註 4) や『八重山生活誌』(註 9) 次のように記されている。

進物台やバキトルブン (方形の盆) に載せた品物の上に被せたり、婚礼行列では、士族男性が頭に被る帕を保管する櫃 (別名入家、ハザキヌシイ) に「御辻」を入れて運ぶとある。

史料に記される利用方法は、王国時代の風俗などを描く絵画にも確認できる (写真 2・3)

進貢船の図には、祈りを捧げる神女と思われる一群の前にバキトルブンに類似する方形の盆に載せた進物に御辻が被せられている。掛け物は中央に模様がみられ、これまで述べてきた御辻の形態と同じである。

写真 3 は、王国時代から近代にかけて続いていた婚礼風俗を描いた絵画である。小姓が持つものは帕を入れるものではなく、花嫁側に持参する進物に布帛を被せ、さらにそれを別布で包んでいる。包んだ布の間から覗く布帛が御辻であろう。

また、首里士族摩文仁家の婚礼の様子を記した史料には玉城家より贈られた御花御酒を座上に飾る際に「美辻で押さえる」とある。さらに、別行には黄や赤の百田紙に包んだ金子を進上する膳に美辻を敷くとあり、御辻は場合によっては膳あるは進物台に敷いて使うこともあったようである (註 13)。

1932 年・1933 年に来沖した山崎正薫氏が撮影した婚禮風俗の花嫁の側には進物台に御辻が敷かれ、その上に引き出物が載っている様子がみられる (写真 4)。

4 「御辻」の布帛素材の概要

御辻に使われる布帛は、鎌倉が「支那布ヲ使用セル」(註 7) と述べているように、舶載された染織品が使われる。

台となる布帛には「龍丸紋のある織物」(註 7)、中央には「ウマントン (御蟒緞)」(註 7)、「鶴亀松竹梅等の模様」(註 8) が、また、刺繍布も使われることがあったようである (註 3)。

王国時代、舶載染織品は貴重品だったので、何かに使用した残り裂もその寸法を記載し紙に包んで保管されていた (註 11)。これらの布帛で御辻をつくる場合は、保管している双紙庫理へ依頼し、小細工奉行所で縫製させていた (註 5)。

八重山では、紅型がツジウツパイに使われていたことが報告されている (註 12)。浮織物や繻珍は貴重品で簡単に入手できるものではない。遠隔地の八重山では、紅型で染めた布を御辻の代用としていたのかもしれない。

物に被せるために染めた紅型の作例はいくつかあり、その殆どが長方形である (註 13) が、芹沢銈介の蒐集品に、中央に紋を染め牡丹唐草文を筒描きの技法で円形旋回させた作例はほぼ正方形である。昭和初期の沖縄では、このようなものを「被せふろしき」と呼んでいた (註 14)。

当館及び沖縄県立芸術大学に収蔵されている鎌倉芳太郎収集の紅型型紙には「被せふろしき」を製作するためと思われる作例が残っている (写真 5・6)。「変わり蜀江模様染地型紙」(沖縄県立芸術大学蔵) は

伊是名島に残る銘苅家旧蔵の絹浅地文紗布にある中央（鏡）の模様が類似しており、紋布を模した紅型（型染）の被せふろしきが、かつては存在していたことが分かる。

Ⅲ　調査結果及び考察

琉球王国時代の御辻と考えられる作例は下記の４件が残っている。

①　芭蕉紺地布（中・絹黄色地花紋様刺繍裂）
②　麻紺地布（中・絹黄色地花紋様刺繍裂）
③　絹浅地文紗布
④　絹つなぎあわせ覆

①～③は現在伊是名村教育委員会の所蔵であるが、第二尚氏王統の初代国王尚円ゆかりの旧家（名嘉家・銘苅家）に残っていたものである。いずれも伊是名村の有形文化財として指定されている。

名嘉家は「伊平屋の阿母加那志」を代々継承してきた家系である。この神職は尚円が姉真世仁金に与えたものである。

銘苅家は尚円の叔父の家系で、銘苅大屋子という特別職を拝命し士族となる。

④は久米島博物館に保管されているが、これも所有は久米島の旧家（上江洲家）である。上江洲家に残る美術工芸品は沖縄県指定有形文化財である。

上江洲家は久米島、具志川間切で地頭代を勤めた家柄。親雲上を称し、家譜も残る。

１　寸法及び形態

現存する御辻の基本的な形態は、先に述べたように、方形の布帛で台とし、中央に少し小さな方形布帛を縫い付けたものである。

しかし、久米島上江洲家の作例と、伊是名島に残る作例３つの作例の台には大きな違いがある。伊是名島の３件は台に裏布が付いていないが上江洲家の作例には、台となる表布は三角の小さい裂と方形布帛で縫い合わされ、裏布が付いている（図５）。

４件の作例の寸法は下記のとおりで、伊是名島名嘉家の作例は縦より横が大きく、伊是名島銘苅家の美辻（③）、久米島上江洲家の覆い（④）はほぼ正方形で縦が若干大きい。

①　縦 54.0　横 66.0（縦横比 1:1.2）
②　縦 72.0　横 78.0（縦横比 1:1.1）
③　縦 49.9　横 48.8（縦横比 1:0.97）
④　縦 84.0　横 80.0（縦横比 1:0.95）

２　布帛素材

名嘉家の作例の一つは芭蕉布を台とし、もう一例は、地色は同じだが、苧麻布である。また、中央（鏡または頂）の布は破損著しいが、芭蕉布に僅かに残る部分から繻子地に刺繍された布であることがみてとれる。苧麻布の場合、中央部の裂はほとんど残っていないが、繻子地平紋が確認できる。伊波が『混効験集』の「辻うちこい」の作例として示した「刺繍したる袱紗状のもの」とは、このようなものだったと思われる。刺繍は裏に糸が渡らず、表面で糸が交差するクローズドヘリンボーンステッチであり、琉球に伝わった刺繍を解明する手がかりとなる貴重な作例である。

銘苅家と上江洲家の作例（③、④）には舶載された紋紗、緞子や綸子など浮織物の絹布が使われている。作例④「覆い」の裏布は藍で染めた苧麻布である。個々の染織品の詳細については、現在分かる範囲でまとめた（P72～84）。

作例①～③は台となる布帛の裁断面を三つ折り並縫いし、鏡となる中央部の布帛もまた、並縫いで縫いつけられている。作例④は三角または方形の裂は並縫いで接ぎ合わされている。

中国から渡来した染織品には、冊封により拝領したものと福建の琉球館で中国商人から買い付けたものがあり、その種類は薄物の絹織物から厚物の羅紗、金糸、銀糸をふんだんに織り込んだ繻珍などがある。琉球国内では、王族や士族の官服としての色衣や帯、帕などに利用された。これらの衣類の一部は現存するが、とても少なく、それだけでは、史料にみえる中国染織品の詳細を知ることは難しい。調度品である御辻に使われる裂は、それを紐解く上でも貴重なものとなる。

Ⅳ　まとめ

御辻は、儀礼の場や品物を進物する場合に被せたり、敷いたりし、18 世紀以前から使用されていた。どのようなものから影響を受け、中央に辻という部分のある形となったのか、そこは残念ながら解明の手がかりが見つからなかった。

これらの御辻はいずれも旧家に伝世しており、特別な行事の際に使われていたものであろう。

御辻には渡来する貴重な染織品が使われており、中国との進貢貿易によってもたらされた染織品が琉球の暮らしにどのように活かされていのか、利用の一端を知ることができた。個々の染織品の種類と史料との照らし合わせは今後の課題である。

最後に、調査にあたっては、実物、写真提供など所蔵者のご厚意を得た。記してお礼としたい。また、久米島博物館の宮良みゆき氏には、資料閲覧の機会を与えていただき感謝申し上げる。

資料①～③の写真は與那嶺が撮影したが、一部早瀬千明氏に協力いただいた。資料④の写真は山田葉子氏より提供を受けた。また、写真4は熊本県立図書館、写真5は沖縄県立芸術大学より提供いただいた。

註

1) ・P 20・53・54『伊是名村文化財写真集』伊是名村教育委員会　平成元年
・P227 (88)『久米島総合調査報告書・論文編・資料編』沖縄県立博物館 1995 年
・P54『伊是名村銘苅家の旧蔵品および史料の解説書』伊是名村教育委員会　平成 19 年
・P40・41『伊是名村名嘉家の旧蔵品の解説書』伊是名村教育委員会　平成 22 年
・P70　與那嶺「資料紹介　風呂敷（包み物・掛け物・被り物）」『沖縄県立博物館・美術館博物館紀要 4 号』沖縄県立博物館・美術館 2011 年
・P8・9『うちくい－沖縄のふろしき－』沖縄県立博物館・美術館　2015 年

2) P33 『混効験集』沖縄県教育委員会　昭和 59 年　※ 1711 年編纂
辻うちこい　辻なしはうちことい云　平板也

3) P84·85　池宮正治『琉球古語辞典混効験集の研究』第一書房　1995 年
伊波本注に「頂即ち真中に刺繍したる袱紗状の如きものにて、神仏又は貴人に物を捧ぐる時、上にかくるもの、所謂ツジなきをただウチクイと言ふ」とある。これは首里城での重い儀礼でも使われていて、単に「辻」ともいっている。伊平屋島銘苅家文書には王家拝領の金の耳盃や君使官のほか、「美辻　壱枚」と「平板　壱枚」、また伊平屋島玉御殿道具帳にも「美辻壱枚　鏡赤地金入錦台水色紗」「平板壱枚　水色花さや御紋付」がある。また『沖縄語辞典』「ミツィジ」に「ふくさ。神仏へのお供え物の上にかける小さな四角い絹の布」とある。現在方言ではウチュクイといい。これも袱紗のように使用されたが、例えば対馬ではヒライタ、福岡県山門郡・長崎でヒライタンとあって、風呂敷の意で使われている。

4) P218 「伊江親方日々記三」『沖縄県史　資料篇 7』沖縄県教育委員会　1999 年
一　塩ふた切つめ弐拾弐斤程、進物台ニ棕櫚之葉敷、上も右葉ニ而おそひ御辻おそひ候事

5) P122-123 「御物方　巳日番」『資料篇第 1 巻 10　那覇市史　琉球資料（上）』那覇市役所　平成元年
一三ヶ寺行幸之時御香御辻并御初上候時、御香御辻御巻物之内ニ而候故、仕替之砌ハ御双紙こおりヨリ御近習御取次言上仕、辻縁共破下候得バ小細工奉行所江申渡縫調させ、本御辻ハ当より御近習御取次御内原江差上候事

6) P94 「玉御殿御道具帳」『伊是名村銘苅家の旧蔵品および史料の解説書』伊是名村教育委員会　平成 19 年

7) P209　鎌倉芳太郎「工芸　染織工」『鎌倉芳太郎資料集（ノート篇）第一巻　美術・工芸』沖縄県立芸術大学附属研究所　平成 16 年
〇十一月十九日「ウチユクイ」ヲ求ム
大里王子ノ使用シタルモノナリ　コレト揃物トナリテ「ミチジ」アリ丸紋龍ノ模様アル鶯茶色ノ浮織地ノ中ニ「ウマントン」ヲ以テ装飾シタルモノナリ　コレハ支那布ヲ使用セルヲ以テ参考品ニ加ヘザリキ －　三巾ニナリオレ共コレハ布ノセマキ故カクシタリシナルベシ
㊤トアルハ「上リ御用」ノ略ニテ王府ニ献上スル品ヲ包ムニ用ヒタルノシルシナリ
「タファバウチユクイ」別ニ「ミファバウチユクイ」／アリ　フトン等ヲ包ムニ用フ

8) P6「高尚優雅な御土産品　案内」沖縄縣工業指導所

みちじ（琉球の袱紗）

琉球の袱紗は赤、黄、黒の淵で中央は鶴亀松竹梅等の模様多くして御祝儀等使用するものなり、今回友禅染したる「みちじ」は其の中心に琉球舞踊を紹介するものなれば琉球土産品としては好適のものと賞讃を受けつゝあり。

9) P113-114　宮城文『八重山生活誌』昭和 47 年

チジウツパイとは天辺（頂）を被う風呂敷の義である。チジウツパイは花嫁行列の時のハザマキヌシイ（冠柯）の上を被うたり、バキタルブンを包む時大風呂敷のほかに小風呂敷を上から被うことがある。このように上から被せる風呂敷をチジウツパイという。

10) P28「首里士族の婚禮記録(摩文仁御殿所蔵)」『南島研究　第三輯』南島研究会　昭和 3 年

一、玉城御殿よりの御花御酒あむしたりにて請取座上に飾之

附飾之仕様御霊前上にして美花御酒飾之此方座敷飾は勝手表に美辻押さへ飾候也

－略－

附媒三貫文さたりあむしたり貳貫文大あかま壹貫文、小あかま籠飯持迄五百文宛黄赤百田紙にて仕出本膳に美辻敷其上に載し進之候也

11) P121「唐御衣裳方　丑日番」『資料篇第 1 巻 10 那覇市史　琉球資料（上）』那覇市役所　平成元年

一御内原ヨリ被下候端物之砌、布幅相残候分ハ寸尺相記紙ニ包、細御切ハ紙袋ニ入御双紙こおり封印仕、里之子た覚書ニ当端書ニ而御双紙庫理行印仕、御近習江差上候こと

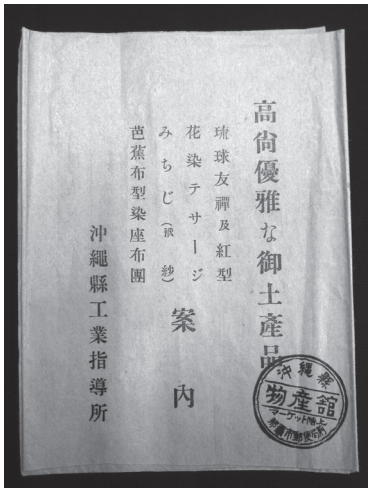
12) P113-114　宮城文『八重山生活誌』昭和 47 年

(2) カナイウツパイ（貢納布ウツパイ）＝カナイは　－略－　士族婦女子の貢納の荒い目の苧の下布である。その下布に紅型（松竹梅）または藍型をつけた風呂敷で大小二種あって、大の紅型はお祝、観音堂参り、十六日祭などおめでたい時のバキタルブン包み用で、小の紅型は棒踊の人に被られたり、チジ（頂）ウツパイに利用されたりしたのである。

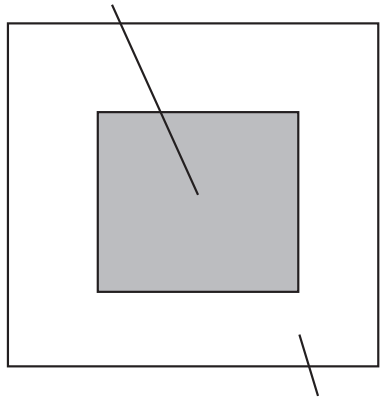
13) P78-83　與那嶺「資料紹介　染織資料V　風呂敷（包み物・掛け物・被り物）」『沖縄県立博物館・美術館　博物館紀要第 4 号』沖縄県立博物館・美術館　2011 年

14) P144　芹沢銈介「「かたちき」と「ぬいひち」」『工藝　100 号』日本民藝協会

長方形のは二布で「被せふろしき」といふ



（写真 1）高尚優雅な御土産品　案内　パンフレット

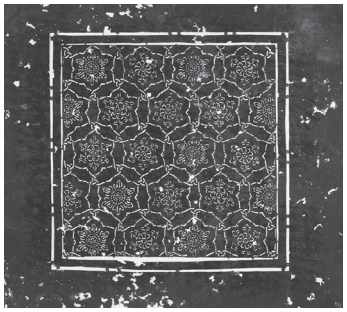


（図 1）御辻の基本的な形態

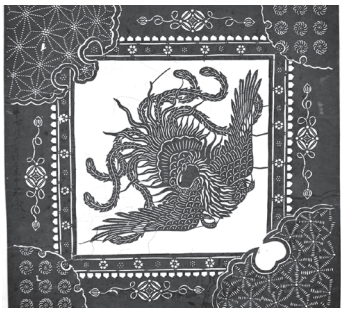
（写真 2）進貢船の図より御辻を被せて供え物を運搬する

（写真 3）比嘉華山「婚姻風俗図」より花婿側の小姓

（写真 4）婚禮風俗（熊本県立図書館蔵）



（写真 5）変わり蜀江模様染地型紙
（沖縄県立芸術大学蔵）



（写真 6）鳳凰模様白地型紙

資料①　芭蕉紺地布（中:絹黄色地花紋刺繍裂）

所蔵：伊是名村教育委員会

寸法：全体（縦 56.2cm　横 69.0cm）
　　中央（縦 33.0cm　横 36.0cm）

布幅：35 cmか（台となる布）

布帛素材・加飾など：

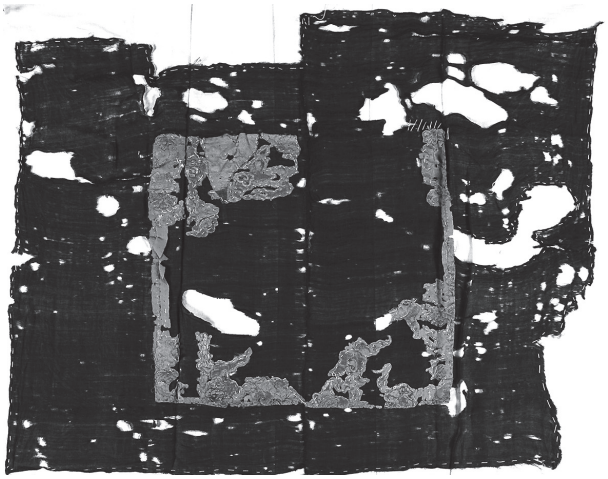
台となる布の素材は経、緯ともに芭蕉（織密度：1cm 間／経 28 本、緯 32 本）である。糸は経、緯ともに撚糸されていない。結び目が所々にみられ、糸績みは結びによる。芭蕉の布幅は計測していないが、35cm前後と思われる。芭蕉は欠損部分が多く、現在木綿布（晒布）に裏打ちされる。色は藍で染められた士族男性の官服の黒朝衣に近く、リュウキュウアイによる藍染で得られた色だと思われる。

中央部の刺繍布は真中が欠損しており、枠状に残っている。刺繍布の基布は厚地の五枚繻子である。目視からは黄色にみえる。基布は中国から入手した繻子と思われる。旧蔵していた名嘉家には阿母加名志の刺繍衣裳も伝世しており、この刺繍衣裳の基布も同様の五枚繻子である。

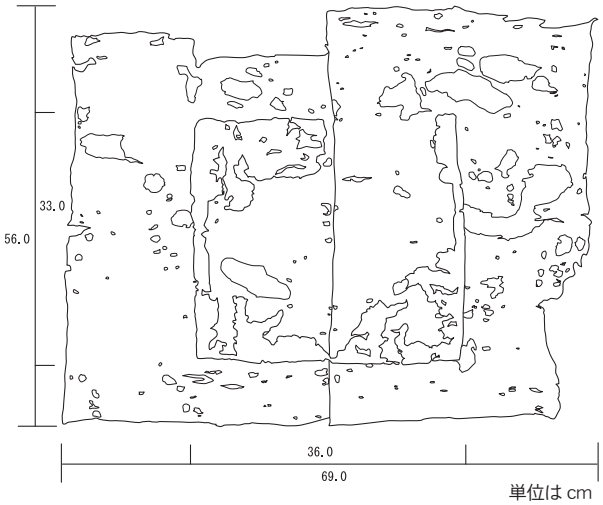
刺繍には花（牡丹か）、瑞雲、唐草、葉などの模様が確認され、刺繍技法は裏に糸の渡らない技法である。表面で糸が交差するクローズドヘリンボーンステッチ（琉球千鳥繍い／寺田貴子 P82「二、琉球文化圏に伝世する刺繍品の調査」『琉球・沖縄の衣生活概観』琉球大学教育学部織染研究室・沖縄庶民の装い展実行委員会　平成 22 年）と、表面で糸を交差させない技法もみられる。模様が盛り上がるように曲線部分には固めの黒い芯が縫い込まれており、中国刺繍などにみられる馬の毛ではないかと思われる。刺繍糸が欠損した部分には下絵の墨による線が残っている。刺繍糸は撚糸されていない絹糸が使われ、薄緑、濃い緑、黄、茶の4色が確認できる。

保存状況：

資料は、写真で分かるように台部分、中央部分ともに欠損箇所が多く、刺繍糸が外れた状態も確認できる。刺繍布は中央が欠損した状態にある。この染織品は神女の衣裳（御衣）を包むものとして長く使用していたようで、刺繍布の箇所が下になったことで、擦れによってこのような状況となったものと考えられる。



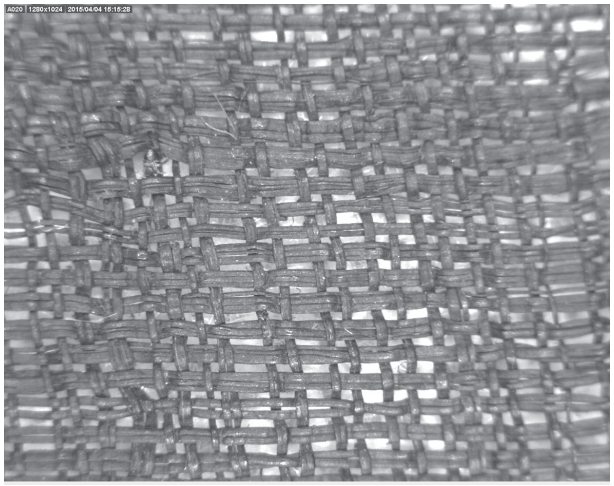
（写真7）芭蕉紺地布　全体



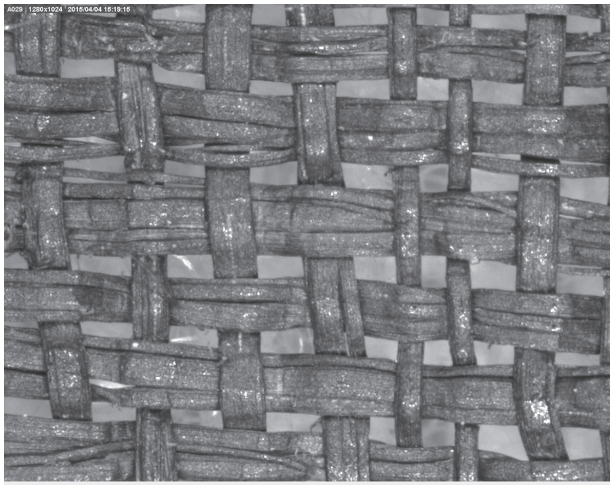
（図 2）芭蕉紺地布　全体

その他：

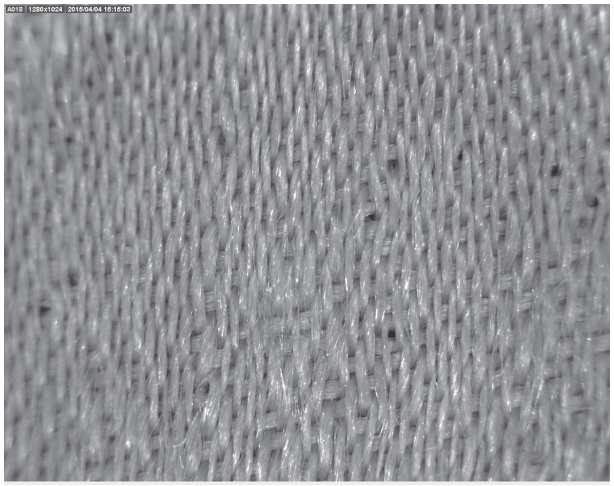
この資料は、伊是名村名嘉家に伝わる「伊平屋の阿母加那志拝領品」（伊是名村指定有形文化財工芸品／昭和 52 年）の一つである。名嘉家は神女「伊平屋の阿母加那志」を代々輩出してきた。『女官御双紙』（1706 年頃）や『伊平屋島旧記集』（1726 年）の記録によると、初代阿母加那志となる尚円の姉真世仁金が、就任時に拝領し、当時残る品のなかに、この資料は記されておらず、製作された時期はもちろん、いつ名嘉家に伝わったのか現在のところ、不明である。



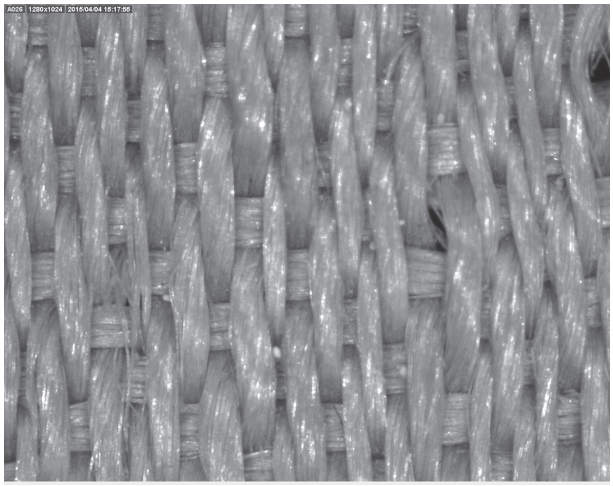
（写真 8）芭蕉部分（50 倍）



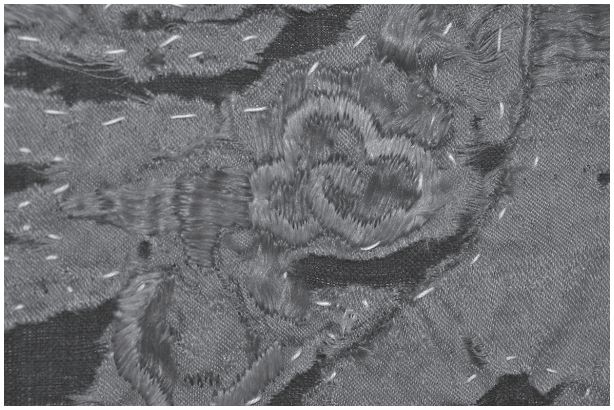
（写真 9）芭蕉部分（200 倍）



（写真 10）刺繍基布部分（50 倍）



（写真 11）刺繍基布部分（200 倍）



（写真 12）刺繍部分

（写真 13）刺繍部分（50 倍）

資料②　麻紺地布（中:絹黄色地花紋様刺繍裂）

所蔵：伊是名村教育委員会

寸法：全体（縦 72.0cm　横 78.0cm）
　　中央（縦 34.0cm　横 36.5cm）

布幅：40cmか（台となる布）

布帛素材・加飾など：

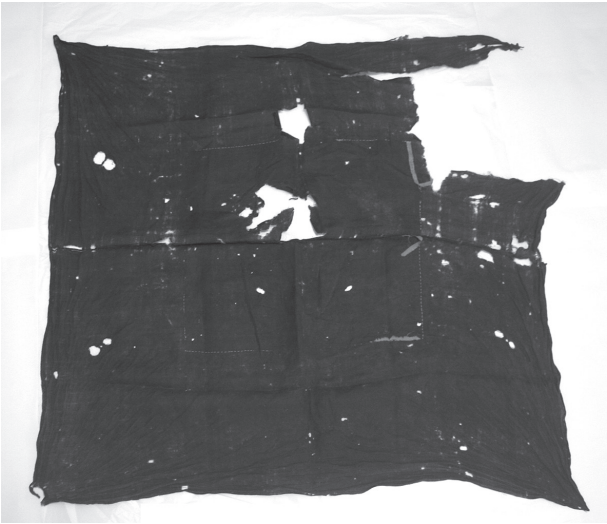
台となる布の素材は経、緯ともに苧麻（織密度：1cm 間／縦 28 本、緯 24 本）である。糸績みは縒りつなぎによる。経糸には撚りがみられるが、緯糸は撚糸されていない。布幅は計測していないが、40cm前後と思われる。色は芭蕉紺地布と同様に、リュウキュウアイによる藍染で得られた色だと思われる。

中央部は欠損しており、僅かに幅 1cm前後の裂が残る。中央には縫い糸のみが残り、中央部に方形の布があったことがわかる。芭蕉紺地布と同様に刺繍布かどうかは、現状では断定できない。基布は五枚繻子地平紋の絹布である。

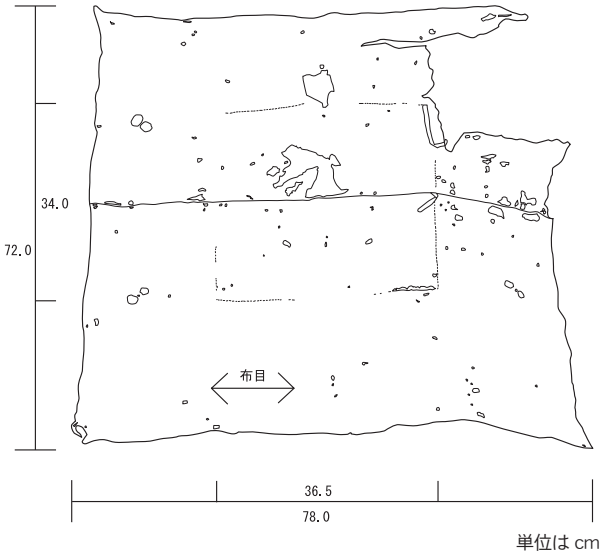
保存状況：

この作例も、芭蕉紺地布と同様に中央部分が欠損しており、神女の衣裳（御衣）を包むものとして長く使用していたようで、刺繍布の箇所が下になったことで、擦れによってこのような状況となったものと考えられる。また、麻布の四隅には包む際にできる布を引っ張った痕跡が残る。

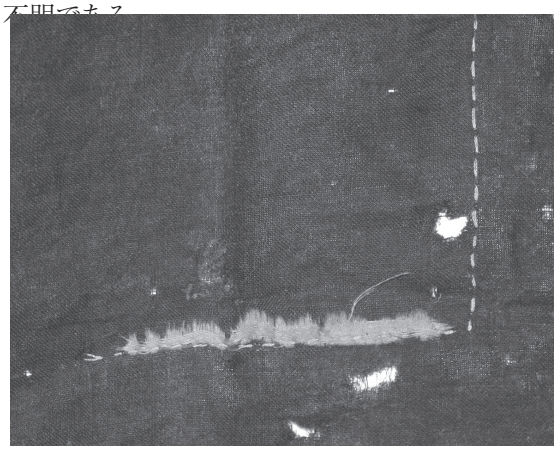
その他: この資料も、伊是名村名嘉家に伝わる「伊平屋の阿母加那志拝領品」（伊是名村指定有形文化財工芸品）の一つであるが、製作された時期はもちろん、いつ名嘉家に伝わったのか現在のところ、不明である。



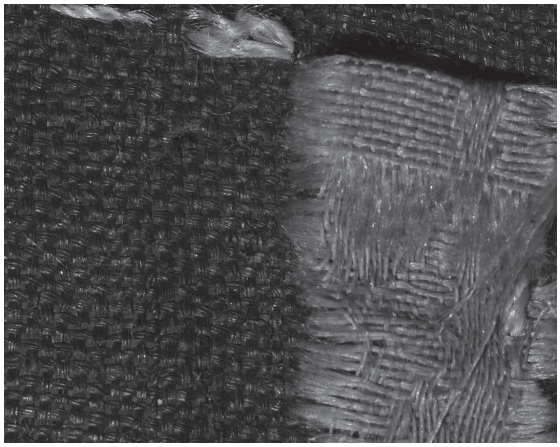
（写真 14）麻紺地布　全体



（図 3）麻紺地布　全体



（写真 15）麻紺地布部分



（写真 16）麻紺地布中央部分

資料③　絹浅地紋紗布

所蔵：伊是名村教育委員会

寸法：全体（縦 49.9cm　横 48.8cm）
　　中央（縦 22.4.0cm　横 22.2cm）

布幅：48.8cm（台となる布）

布帛素材・加飾など：

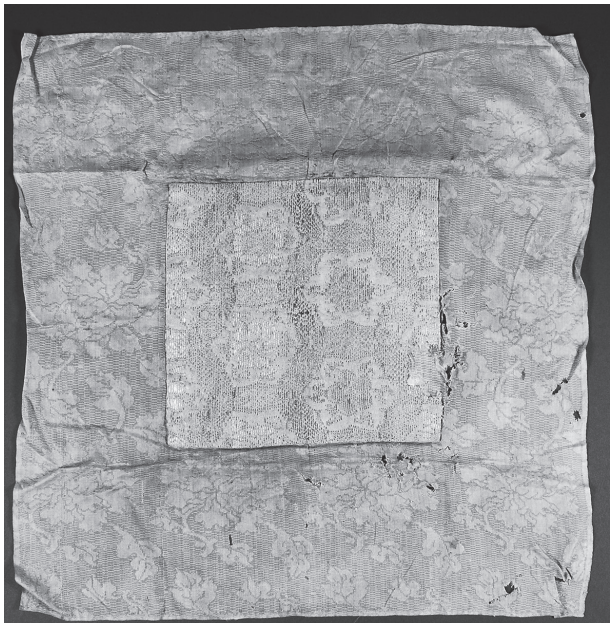
台となる布は三本絽と一本絽を繰返す地に平織で紋を織り出す。文様は牡丹唐草である。色は薄水色、色材は不明である。撚糸されない引き糸が使われている。

中央（鏡）の帛は五枚繻子地に平銀糸や色糸が織り込まれ花模様を織り出す。経の地糸は二本引き揃え。紋部には別糸（青）が絡み紋糸を押さえている。紋部の花模様の詳細は不明だが、紅型の型紙に類似の作例がある（写真 5）。

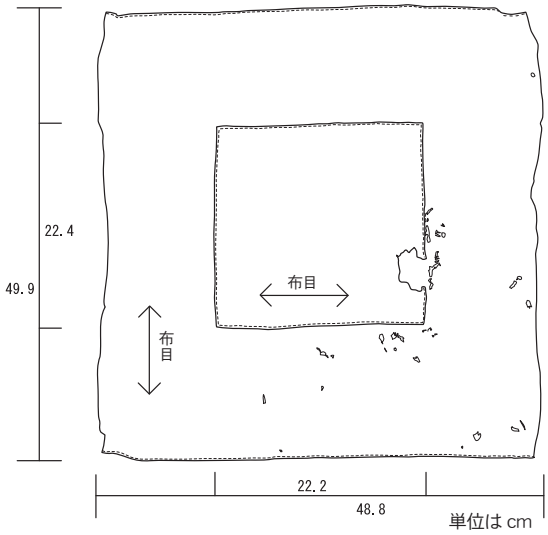
保存状況：

写真で確認できるように比較的、破損箇所は少ないが、経年劣化により台の紗は退色著しく汚れがみられる。中央部（鏡）は虫食いにより大きな欠損箇所があり、平銀糸は銀部分が失われている箇所も多い。

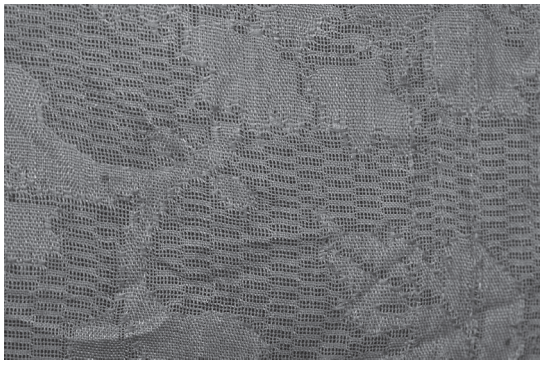
その他：この資料は、伊是名村銘苅家に伝わる「銘苅家所蔵品」（伊是名村指定有形文化財古文書・工芸品／昭和 52 年）の一つである。『玉御殿御道具帳』（1870 年）に「美辻壱枚鏡赤地金入錦台水色紗」と記されている。実物は退色のため、赤地であるかどうか不明である。また本資料は平銀糸で金糸ではない。香箱に掛ける（覆う）ものであったと伝わる。



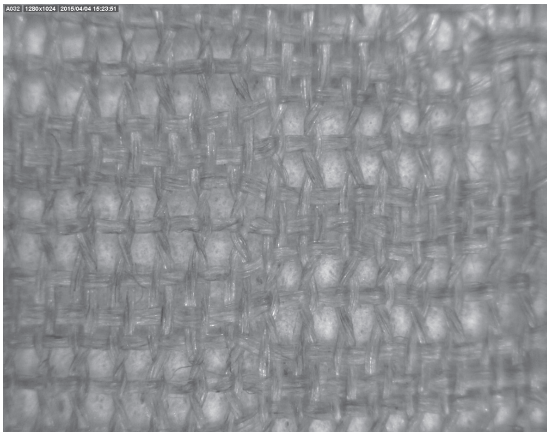
（写真 17）絹浅地紋紗布



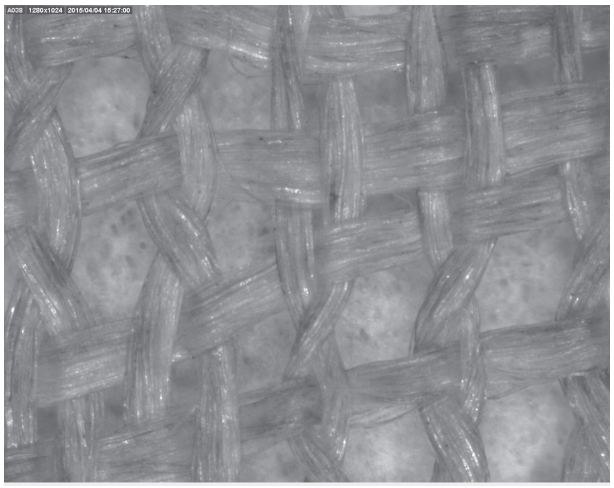
（図 4）絹浅地紋紗布



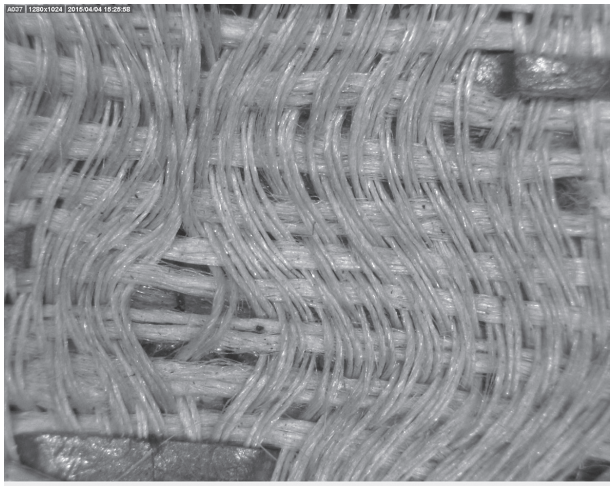
（写真 18）紋紗部分



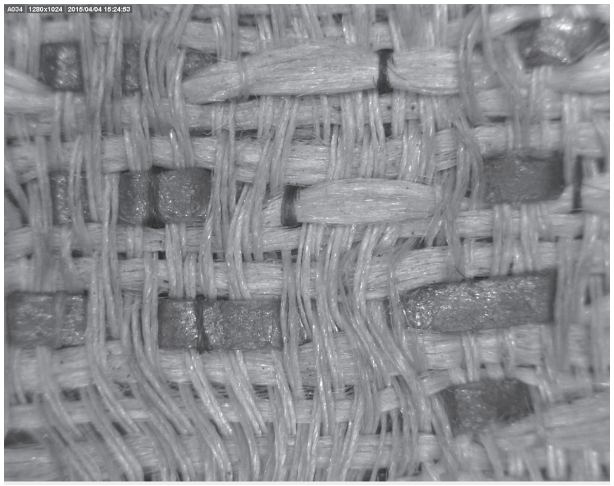
（写真 19）紋紗部分（50 倍）



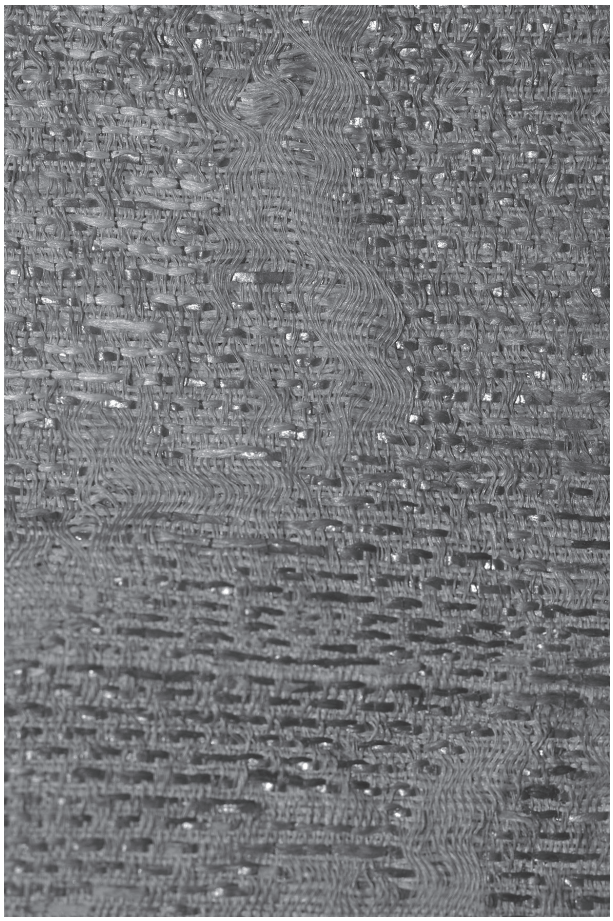
（写真 20）紋紗部分（200 倍）



（写真 22）中央（鏡）の繻子地部分（50 倍）



（写真 23）中央（鏡）の平銀糸部分（50 倍）



（写真 21）中央（鏡）部分

（写真 24）中央（鏡）の平銀糸部分（200 倍）

資料④　絹つなぎあわせ覆

所蔵：個人蔵

保管：久米島博物館

寸法：全体（縦 87.0cm　横 84.5cm）
　　中央（縦 61.0cm　横 59.0cm）

布帛素材など：

表には、絹による方形の裂と三角に裁断された裂 73 片が縫い合わされている。裏には苧麻製の布が 3 片接ぎ合わされ、表裏合わせて 76 片の布帛が使われている。裂を種類ごとに分類してみると、裏は苧麻による 1 種類、表には 25 種類の絹布がみられた。表の中央部には双鶴に剣山、波、牡丹などが表現された帛が置かれている。この帛は左右は織り耳、上下は明確に浮き織物が完結しており、明・清服における補子だったのではないかと思われるが、このような模様構成による補子の作例は確認できなかった。

その他の裂の詳細は次頁を参照のこと。

表の裂を種類別にみてみると、1 点のみの裂もあれば、数点使われる裂もある。多いものは 12 点におよぶ。また、色別に裂の配置構成をみたが、意識的に配したようにも見えるが、同じ種類の裂を続けて接ぎ合わせている場合もある。残り裂を使用し、縫製しているため、裂の多い少ないによって、このようなバラつきが出てきたのか、殆ど意識せずに縫製した結果がこうなったのか、判断の難しいところである。

裏布には苧麻が使われ、薄い水色に染められている。リュウキュウアイによる藍染めだと思われる。また、裏には「御辻」の墨書が残る（写真 26）。

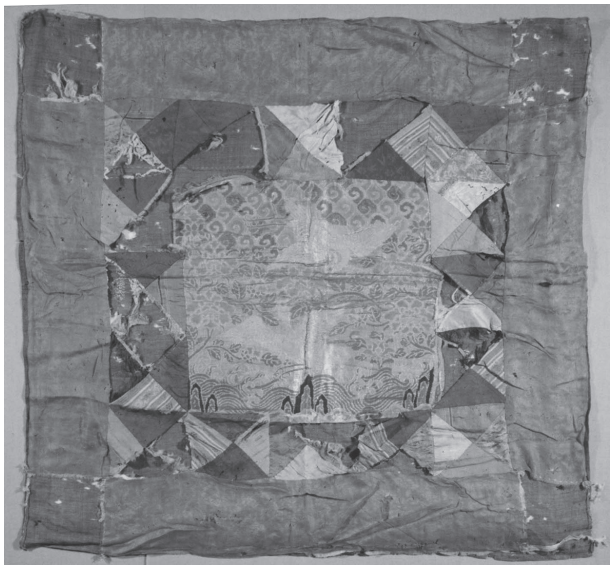
保存状況：

三角または方形の裂には欠損した部分（24 箇所）があり、中央の双鶴文の帛は経糸の破損で緯糸が外れかけている状況である。虫食い跡も多い。

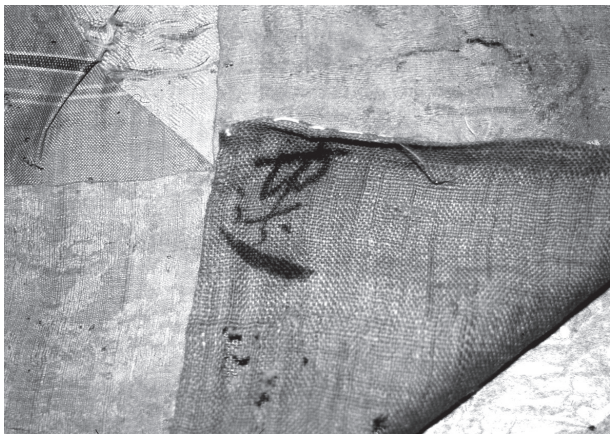
その他：

この資料は、久米島町具志川の上江洲家に伝わる「上江洲家資料」（沖縄県指定有形文化財歴史資料／平成 21 年）の一つになる。上江洲家は久米島具志川間切の地頭代を務めた家系で、近世末には久米島産のお茶を贈答し歌（和歌・漢詩）を頂戴するなど琉球の知識人達と交流が知られる。この「御辻」もその際に頂戴した可能性もあるが、詳細は定かではない。布帛の状態が極めて悪いのは、上江洲家に贈られた時点で既に古布だったためとも考えられる。

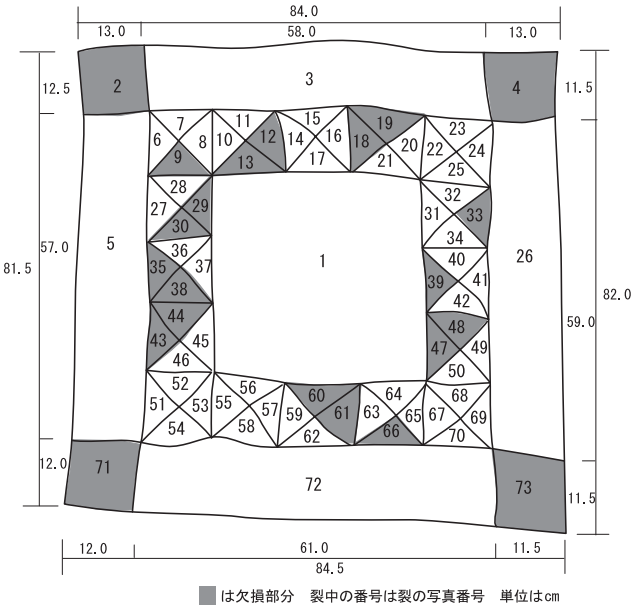
裂の種類は様々で、26 種類に及ぶ（P76 ～ 84 参照）。



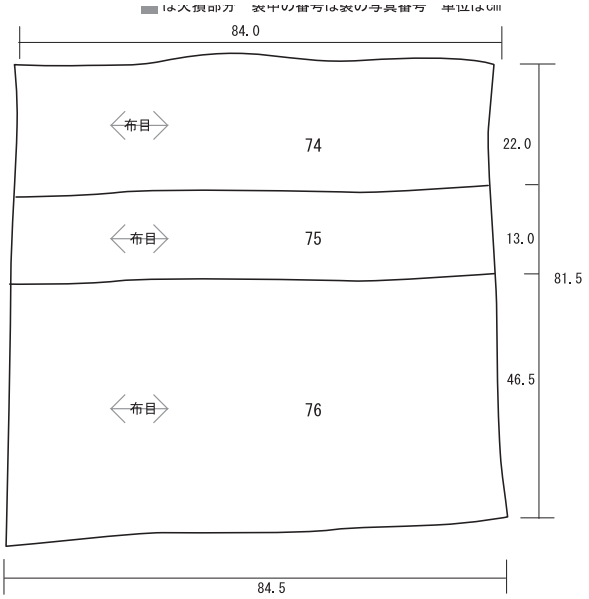
（写真 25）絹つなぎあわせ覆



（写真 25）絹つなぎあわせ覆　裏「御辻」墨書あり

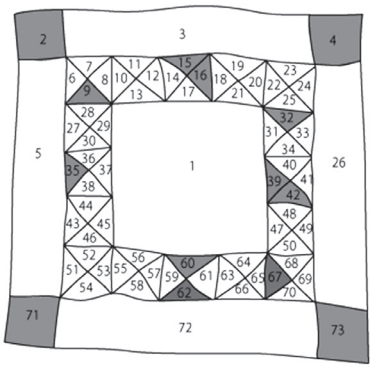


（図 5）絹つなぎあわせ覆　表

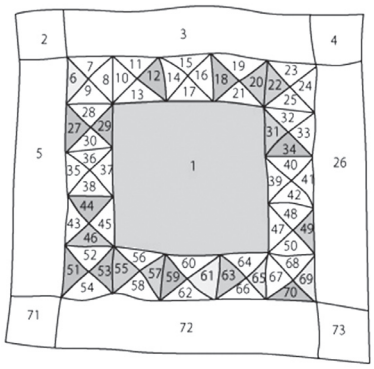


（図 6）絹つなぎあわせ覆　裏

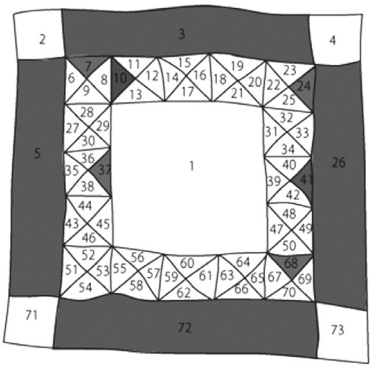
絹つなぎあわせ覆に使用される裂の色別の配置図



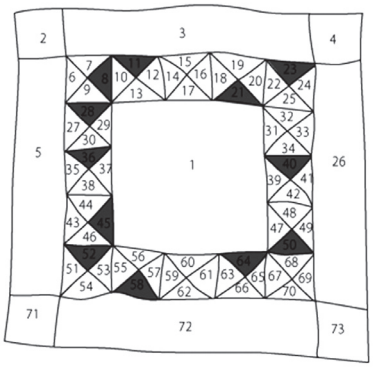
白の裂の配置



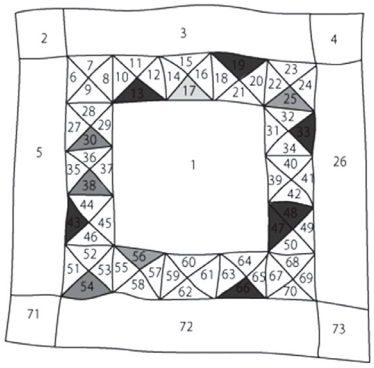
薄茶・黄色の裂の配置



茶色の裂の配置



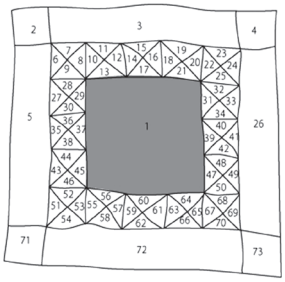
緑色の裂の配置



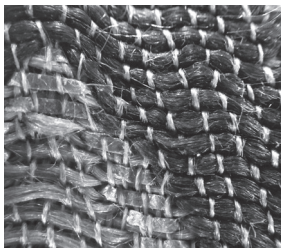
青・水色の裂の配置

絹つなぎあわせ覆に使用される裂の種類（図：裂の配置場所・写真：裂拡大）

① 錦（双鶴・牡丹・剣山・青海波・渦巻文） 織密度：1cm 間（経 40 本・緯 15 本）

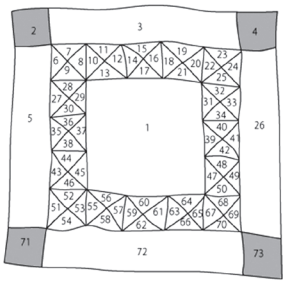


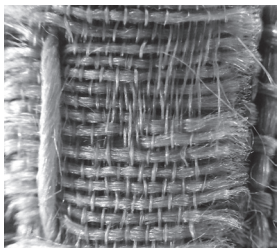
裂1全体



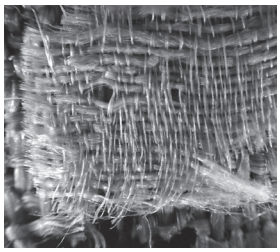
裂 1 部分

② 平地繻子紋（白地／模様確認できず） 織密度：1cm 間（経 52 本・緯 24 本）※縫い代 1cm 程残る



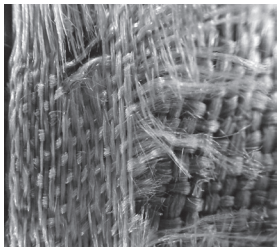


裂2



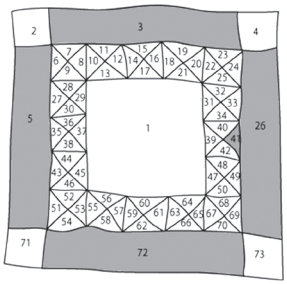
裂4

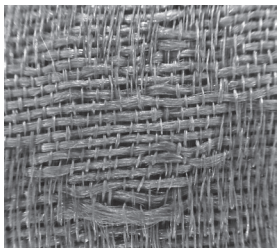
裂 71



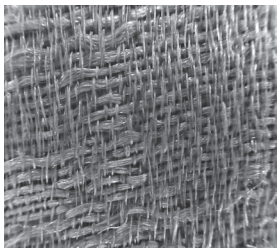
裂 73

③ 繻子地平紋（茶色／模様確認できず） 織密度：1cm 間（経 200 本・緯 26 本）

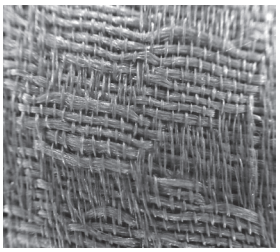




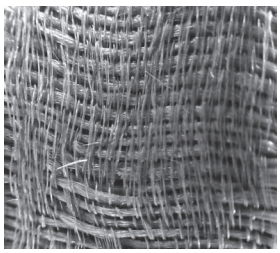
裂 3



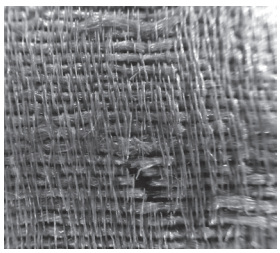
裂 5



裂 26

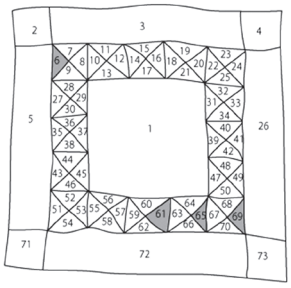


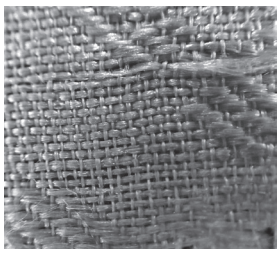
裂 41



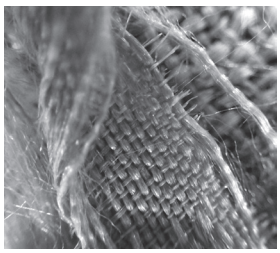
裂 72

④ **平地綾紋（黄色／幾何学文か）**　織密度：1cm 間（経 32 本・緯 30 本）

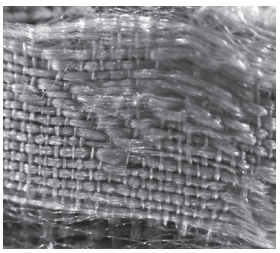




裂 6



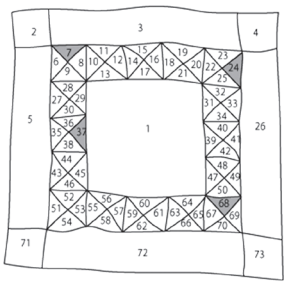
裂 61

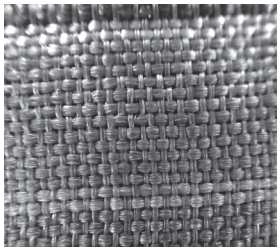


裂 65

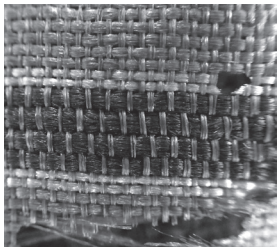
裂 69

⑤ **平地（薄茶地／縞）**　織密度:1cm 間（経 32 本・緯 30 本）※経糸２本引き揃え。青と水色の２本の縞。青は太めの糸

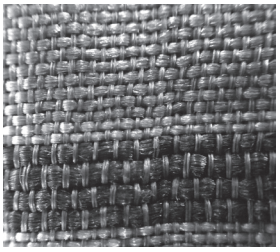




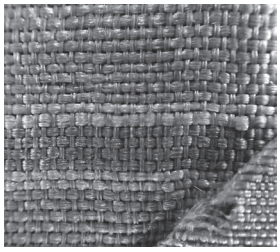
裂 7



裂 24

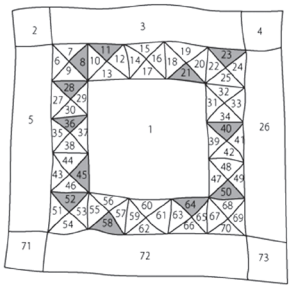


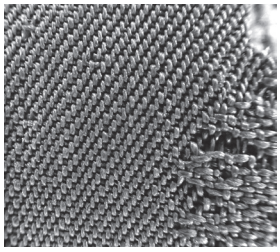
裂 37



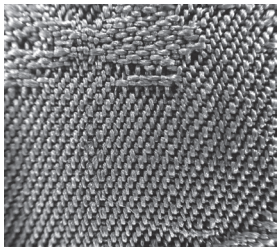
裂 68

⑥ **綾地綾紋（緑地／笹蔓文）**　織密度：1cm 間（経 60 本・緯 50 本）※糸は強撚。裂 28・裂 45 は裏を使用か?

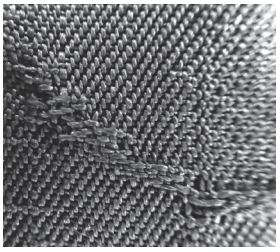




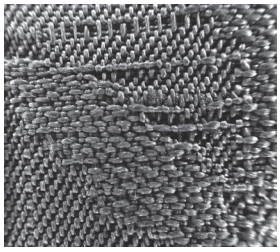
裂 8

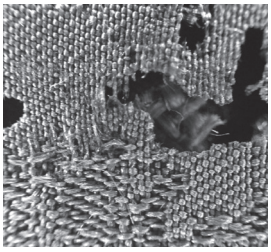


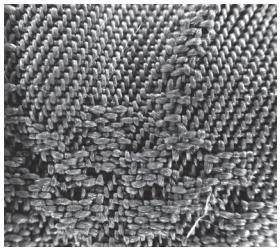
裂 11

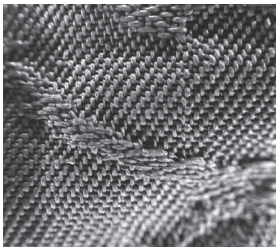


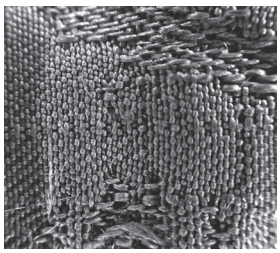
裂 21

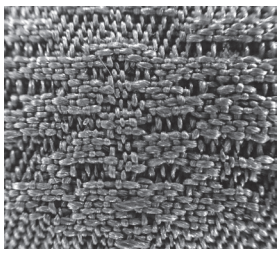

裂 23

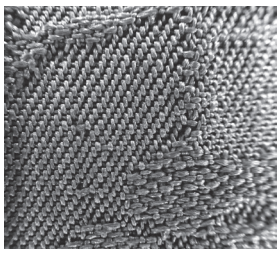

裂 28

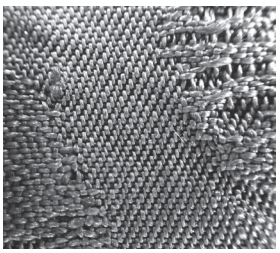

裂 36

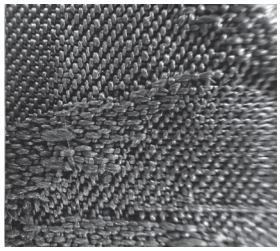

裂 40


裂 45

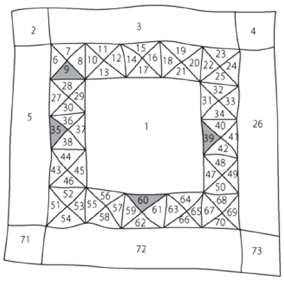

裂 50

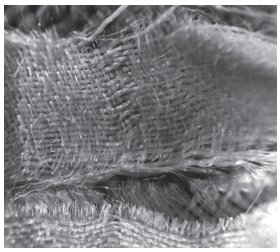

裂 52

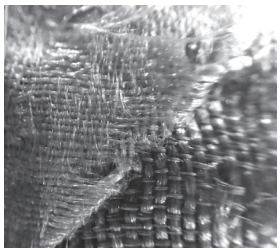

裂 58

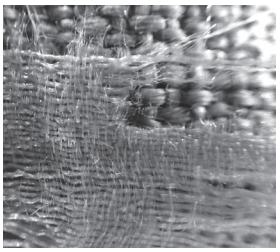

裂 64

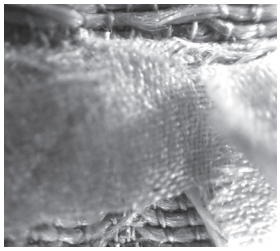
⑦ 平地繻子紋（白地／模様確認できず） 1cm 間（緯 60 本か）※五枚繻子　※縫い代などが僅かに残る



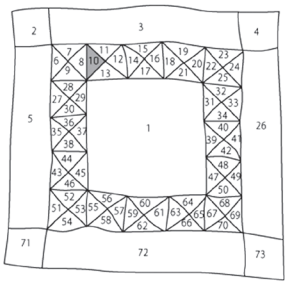

裂 9

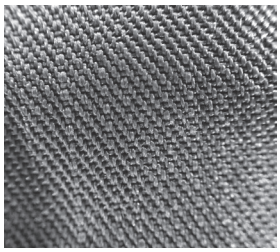

裂 35


裂 39


裂 60

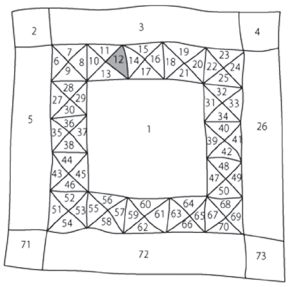
⑧ **綾織（茶 / 模様なし）** 密度：1cm 間（経 60 本・緯 50 本）

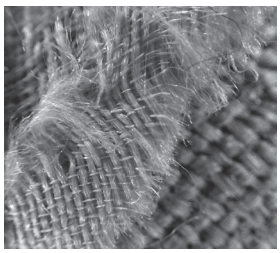




裂 10

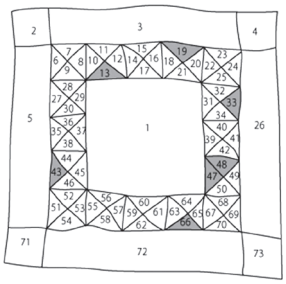
⑨ **平地繻子紋（薄茶 / 模様なし）** 織密度：1cm 間（経 60 本・緯 30 本）※縫い代が僅かに残る。⑦に似るが色が薄い

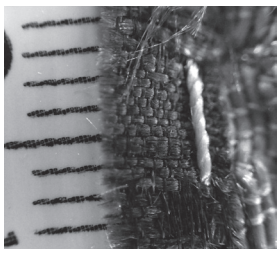




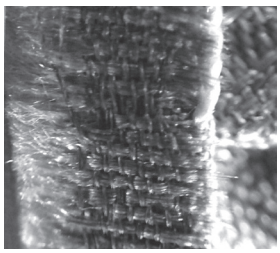
裂 12

⑩ **繻子地平紋（青／模様確認できず）** 織密度：1cm 間（経 50 本・緯 30 本か）※縫い代分が僅かに残る

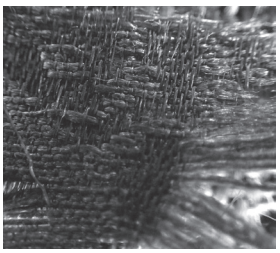




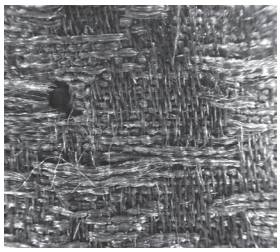
裂 13



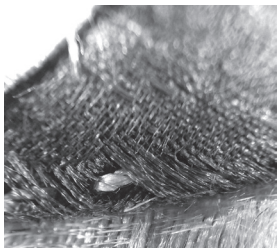
裂 19



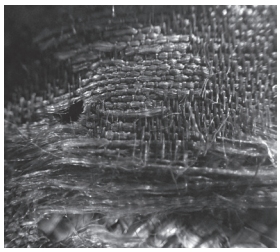
裂 33



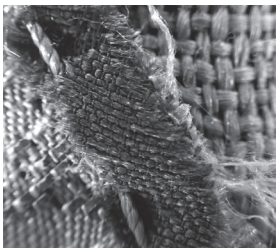
裂 43



裂 47

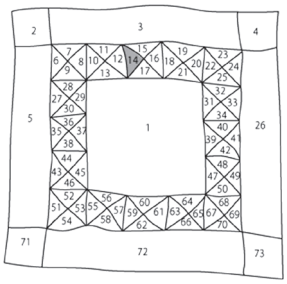


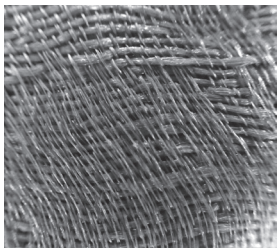
裂 48



裂 66

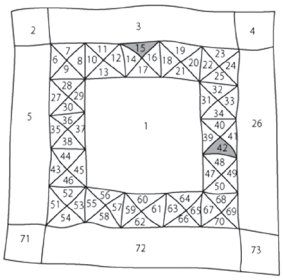
⑪ **繻子地平紋（茶／模様確認できず）**　織密度：1cm 間（経 100 本・緯 30 本）※五枚繻子

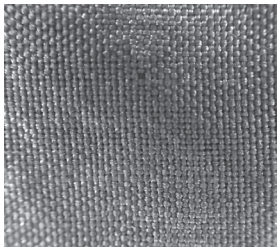




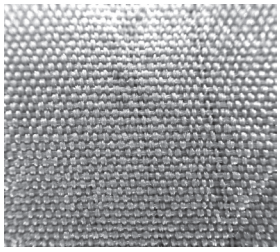
裂 14

⑫ **平織（白／模様確認できず）**　織密度：1cm 間（経 50 本・緯 30 本か）※縫い代 1cm 程が残る。紋があったかどうか、縞糸が入るか不明



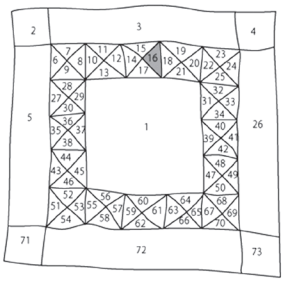


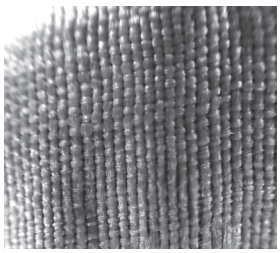
裂 15



裂 42

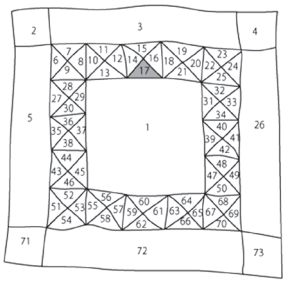
⑬ **平織（白／模様確認できず）**　織密度：1cm 間（経 50 本・緯 45 ～ 50 本）

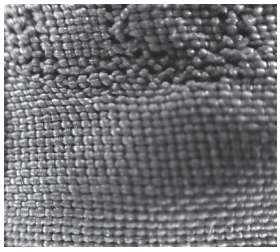




裂 16

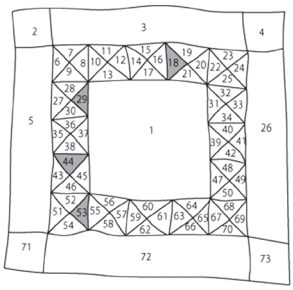
⑭ **平地紋絽（水色／花文）**　織密度：1cm 間（経 40 本・緯 30 本か）

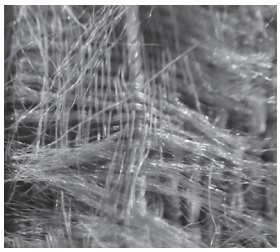




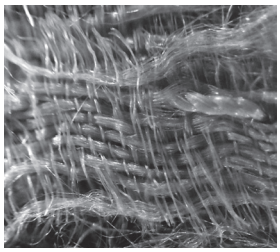
裂 17

⑮ **繻子地平紋（薄茶／模様確認できず）**　織密度：1cm 間（緯 30 ～ 34 本か）縫い代が僅かに残る。

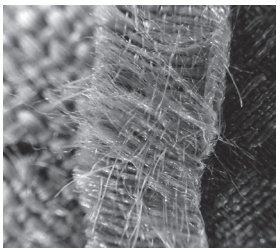




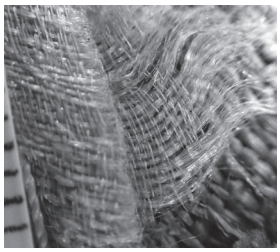
裂 18



裂 29

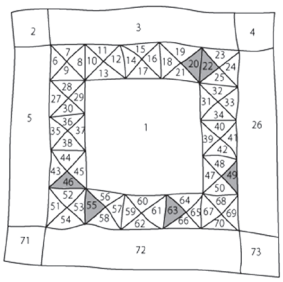


裂 44

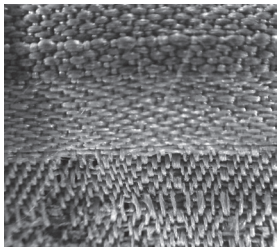


裂 53

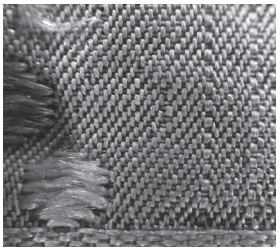
⑯ **綾地浮織物（紋入縞／花文（白・緑）・不明（銀糸入）・いちご唐草・雷文）**　織密度：1cm 間（経 70 本・緯 60 本）※平銀糸あり



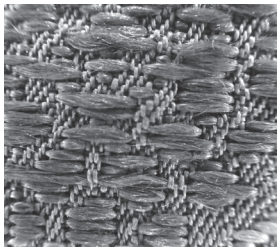
裂 20　全体



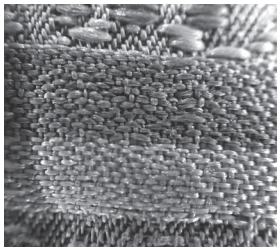
裂 20-1



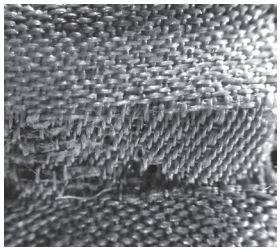
裂 20-2



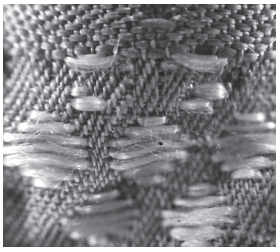
裂 22-1



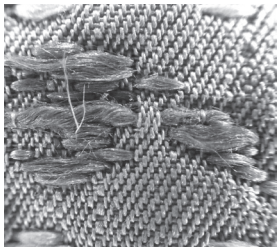
裂 22-2



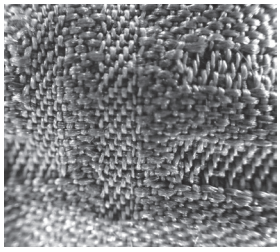
裂 22-3



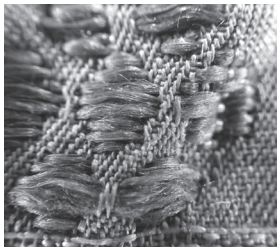
裂 22-4



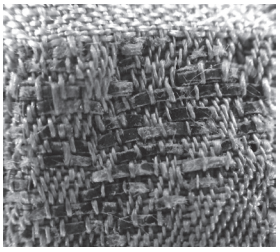
裂 46-1



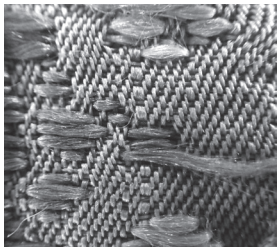
裂 46-2

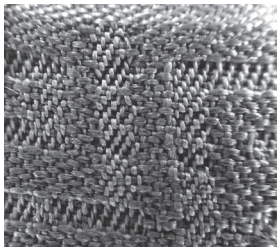


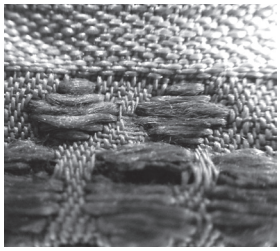
裂 46-3

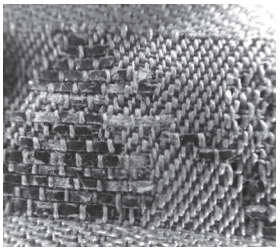


裂 46-4

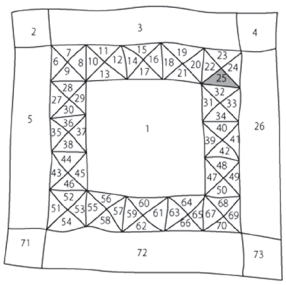

裂 49-1

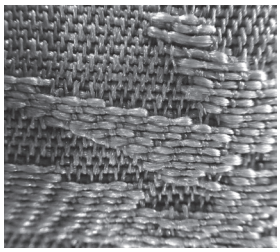

裂 49-2


裂 55

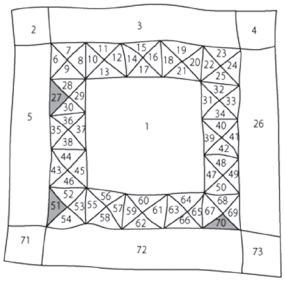

裂 63

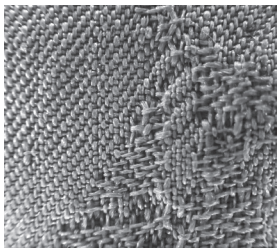
⑰ **綾地繻子紋 (水色／笹蔓文)**　織密度：1cm 間（経 70 本・緯 38 本か）

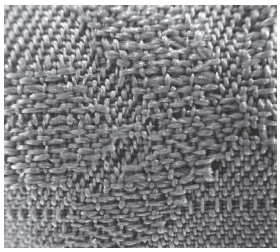


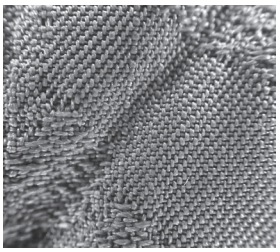

裂 25

⑱ **綾地繻子紋（薄茶／唐草文）**　織密度：1cm 間（経 52 本・緯 68 本）

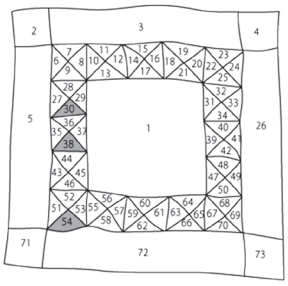


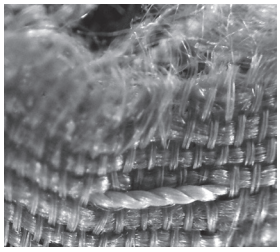

裂 27

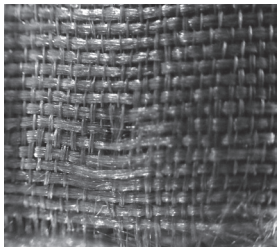

裂 51

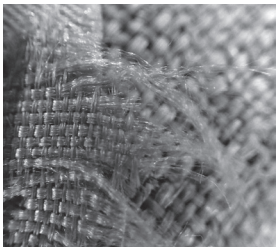

裂 70

⑲ **平織（水色／模様確認できず）**　織密度：1cm 間（経 30 本・緯 20 本）※経糸は２本引き揃え。
縫い代が僅かに残る

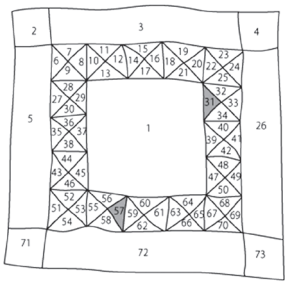


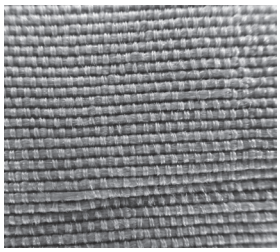

裂 30


裂 38

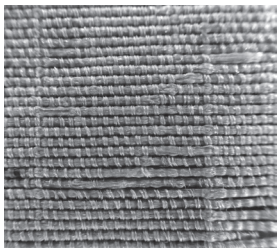

裂 54

⑳ **平織（薄茶／模様無し）** 織密度：1cm 間（経 44 本・緯 28）※経糸は２本引き揃え



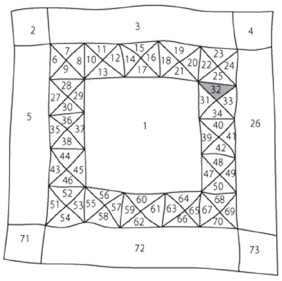


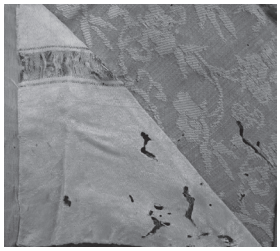
裂 31



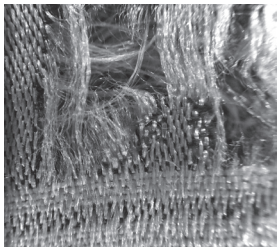
裂 57

㉑ **繻子地平紋（白地／青縞）** 織密度：1cm 間（経 84 本・緯 23 本か）※五枚繻子



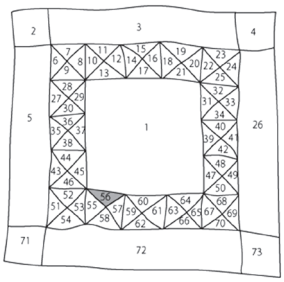


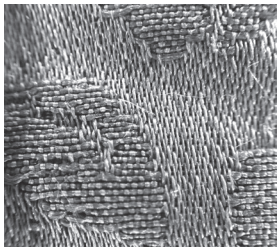
裂 32-1（全体）



裂 32-2

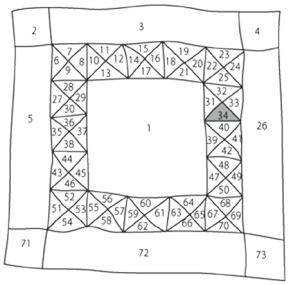
㉒ **繻子地平紋（水色／笹鶴・蝶文）** 織密度：1cm 間（経 70 本・緯 38 本か）

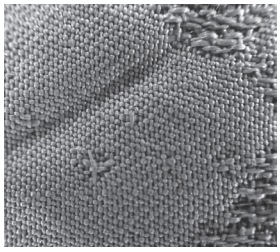




裂 56

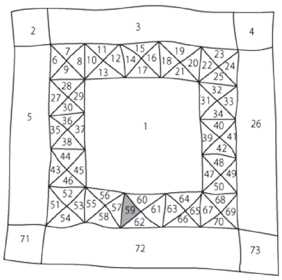
㉓ **平地綾紋（薄茶／花唐草）** 織密度：1cm 間（経 50 本・緯 46 本か）

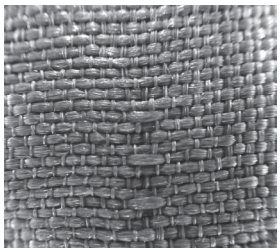




裂 34

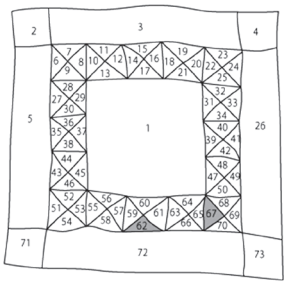
㉔ 平織（薄茶／模様無し）　織密度：1cm 間（経 28 本・緯 26 本か）※経糸は 2 本引き揃え

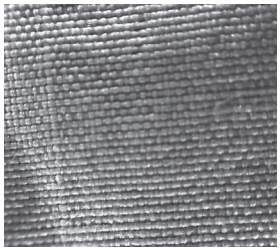




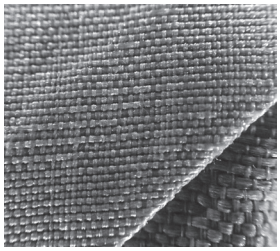
裂 59

㉕ 平織（抹茶色／模様無し）　織密度：1cm 間（経 54 本・緯 40 本）



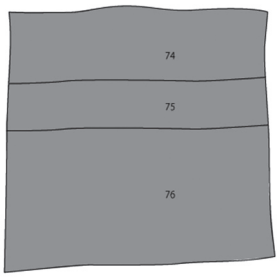


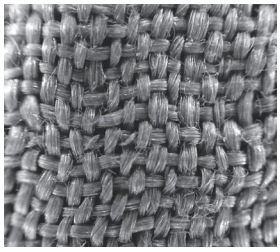
裂 62



裂 67

㉖ 苧麻平織（水色／模様無し）　織密度：1cm 間（経 16 本・緯 16 本）





裂 74・裂 75・裂 76